

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Professor Tomoshichi Konishi : A Tribute

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1983-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 守夫, Kohno, Morio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2236

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



小西友七先生の人と学問

河野守夫

小西友七先生は、昭和58年（1983年）春、32年間勤続の神戸市外国語大学を停年退職された。その間、英語学研究に日夜敢しく打ち込んで幾多の学問業績を残し、学界を裨益啓蒙される一方では、あたたかく学生に接し、多くの英語学徒を育成して神戸外大の学界での地位を一段と高められた。

小西先生の学問は、言語現象を特定の立場に片寄らずに総合的・全体的に考察しようというところに特色がある。そのために先生は伝統文法の枠組を利用された。すなわち、広く資料を蒐集してコトバの現実の姿を詳しく調査し、その資料の *raison d'être* を出来るだけ多くの言語理論や言語環境を考慮に入れて考察し、そこから一般原理を抽出して独自の文法体系を打ち立てようとされたのである。これは米国の R. B. Long や英国の R. Quirk などの文法研究と一脈通じるところがあるが（事実、先生は Long 教授とは親交があった（「R. B. ロング教授追悼」参照）、先生は1930～40年代に構造言語学が盛んになっても、また1960～70年代の変形生成文法の最盛期にも、この姿勢を頑としてくずされなかった。このように先生は伝統文法の枠組の中に踏みとどまりながらも、一方では次々と提唱される学説を実に貧欲に消化するよう努められた。私共は言語理論の動向を、その筋の専門家からでなく、先生から示唆されて醒目させられたことが幾度かあった。先生は言語資料の取扱いにあたって、単に英語母国語話者の判断だけでなく、理論面からの裏づけを敢しく求め、さらにテキスト全体の構造や発話者の発音や心理をも考慮するように努められ、私共にもそうするようすゝめられた。この総合

的なアプローチは最近ようやく学界で注目されるようになったが、先生の授業をうけた卒業生の中には、最近の語用論やテキスト文法・談話文法の視点を先生が早くからもっておられたことに思いをいたす者が多い筈である（「センテンスを超えた文法性」参照）。

先生の研究論文は多方面にわたるが、中でも辞書学、語法研究、黒人英語研究の分野で劃期的な業績をあげられた。今、こうして先生の記念号を編むにあたって改めて先生の業績をふりかえてみると、市河三喜先生の『英文法研究』以来脈々として続いたわが国の英文法研究の伝統的手法が、小西友七先生の手によって、こゝに見事に花開いたという感を新にさせられる。かなりの疎漏があるかもしれないが、これらについてももう少し詳しく見てみたい。

辞書学については、学生時代に岩崎民平、A. S. Hornby 両教授の薫陶をうけ、卒業後間もなく大辞典の編集作業に参加された経験と、その後の英文法研究から先生独自の辞書学が体係づけられた。それに基づいて編纂されたものが『アンカー英和辞典』『小学館ランダムハウス英和大辞典』『小学館英和中辞典』『研究社新英和大辞典』などで「語法の解説や語義上の情報を統語的に可能な限り明示的に提供することによって、英文を読むだけでなく、作るときにも役立つ学習辞典」は先生によって先鞭がつけられたのである。

語法研究は先生の主要な研究領域であって、その洞察の深さは、先生が大塚高信先生の「大阪英語学談話会」で活躍された比較的初期の論文が既に Sebeok (1967) によって広く紹介されたことでわかる。先生はこの分野で文字通り学界の先端を常に歩まれた。“The Growth of the Verb-Adverb Combination in English”などは Bolinger (1972), Sroka (1972), Lipka (1972) らに参考にされ、引用に供されている。著書『現代英語の文法と背景』『現代英語の文法と語法』『英語シノニムの語法』『アメリカ英語の語法』は英語学徒の座右の書であり、9巻に及ぶ『クエスチョン・ボツ

クス・シリーズ』は中学から大学まで英語教師が1番多く利用する参考書の1つである。

また、先生はかねてから「語の文法」という考え方を示唆してこられたが、その構想が実って、1980年に『英語基本動詞辞典』が出版された。これは世界で最初のユニークな企画で、やがて形容詞・副詞、名詞編が続く予定と聞いている。

先生の語法・文法研究の中で1つの大きな分野を占めているのが前置詞の研究である。1955年に出た『英文法シリーズ』の中の『前置詞(下)』を皮切りに『英語の前置詞』『英語前置詞活用辞典』『英語前置詞活用辞典(簡約版)』という一連の著作は、それ自身わが国の前置詞研究の金字塔であると同時に、これまた先生の編集になる『英語慣用法辞典』などとともに、英語をなりわいとしている人達の恰好の指針となっている。

黒人英語研究の分野では J. C. Harris, *Uncle Remus* を主要テキストとした一連の論文「ニグロ方言覚書」や「黒人英語、この10年」、それにアメリカの The Center for Applied Linguistics での研究の成果を折りこんだ J. L. Dillard : *Black English* の訳書『黒人の英語——その歴史と語法』などの著作があるが、これらは斯界での先駆的な研究と言われている。

先にあげた『英語基本動詞辞典』が出版されたとき『英語青年』の書評子はこれについて次のように評している。「H. E. Palmer の *A Grammar of English Words* (1938) に出合って以来、すくなくならぬ日本の英文法家が、日本人の手になる日本人のための、よりよい「語の文法」を書くことを夢みただけである。……(しかし)あるいは語法の海に足をとられて記述の枠組を発見するにいたらず、あるいは新しい文法理論の応接にいとまなく、英語の実態を調べることを怠り、見るべき成果をあげぬうちに(月日が流れた中であって)、本辞典の成就是目を見張るものがあり、続刊の計画とともに、まことに壮挙というべく……大いに祝福に値する。」そして書評子はこの「詳細かつ徹底的に」記述した辞書の出現に「この(文法研究に対する)情

熱の正体は（一体）なんであるのか」と驚嘆の色をかくしていない。蓋しこれは単にこの書物への評価だけでなく、先生の学問全体への評価にも通じるものがあるので、こゝであえて引用させていただく。

このように先生の学問業績にふれるとき、われわれはその研究の手堅さと重厚さに圧倒される思いがするが、先生はこれらについて非常に謙虚であった。先生は研究の内容についてときどき私共に疑義を正され、コメントを求められることがあったが、その丁寧なもの腰にいつも恐縮したことであった。

また、先生は派手な振舞いを極端に嫌われ、生活は質素で地味な方が研究に都合がよいという意味のことをよくもらされた。ある日の雑談中に「自分1人では勿論、家族と一緒にでもいわゆる遊びに出かけたと言えるようなことをしたのは、家族連れで弁当をもって神戸大学の校庭に出かけて神戸の市街の眺めを楽しんだことが1度あるだけだ」というようなことを私に言われたことがあった（先生のお宅から歩いて20分ほどの山の中腹に神戸大学がある）。先生にしてみれば、自分の世代と私共の世代の生活態度の差を何げなく描写されたのであったろうが、既に日本が世界の経済大国になりつつあった頃の話であったので、私には若い世代の研究者が人並の楽しみを求めた上で要領よく研究することへの警鐘と思われて（先生には既に忘れておられるだろうが）脳裡を離れない1小話となった。「われわれ大学に勤める者は勉強せねばならないと思う状態では駄目で、勉強したいと思わねばならない」というのが、先生の御生活から私が学んだ1つの結論である。実際私共から見ると先生には研究こそが唯一の楽しみであって、いわゆる世間的な娯楽は無関心に近いようである。

先生が私共によくさとされたのは「人の和」ということである。先生は戦時中ビルマのインパール作戦に従軍されたが、その際敗走する日本兵の生死をわけたのは協力態勢の有無であったと述懐されたことがあったが、この経験を共同研究の運営に生かされた。平和を維持するということは、他人の気持を汲んでそれに沿って行動するということが前提となる。そのためには自

分の「我」を抑えねばならないことも多い。先生は職場で、また学生の指導に際してさえも、このような配慮をいつもされた。1968年、当時私が勤めていた関西学院大学が紛争に揺れていたとき、アメリカから帰国されたばかりで未だお疲れのとれないのに、しかも御自身も紛争の渦中に居られた先生から、長文のお手紙をいただいた。そこには教師と学生の心の絆を大切にしたい日常の教育活動の必要性が説かれていたことを今もよく記憶している。

1980年、先生は図書館長に選出された。在任中過労のために病を得られたが、最近は随分と快方に向っておられると聞いている。今後とも十二分に御健康に留意されて、それぞれの分野において先生に倣おうとしているわれわれ後進の者を末長く御指導下さるようお願いしてやまない。